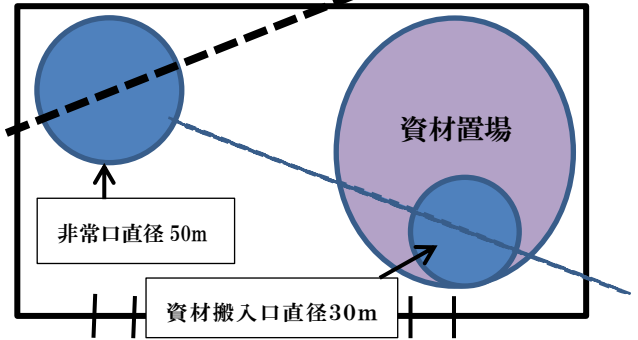


リニア新幹線梶ヶ谷非常口及び資材搬入口新設工事説明会報告

2017年3月4日(土) 13:30～16:20 川崎市高津区・梶ヶ谷小学校体育館

説明会参加住民 約300名

工事ヤード平面図



説明の概要

- ◆工事場所 JR貨物ターミナル駅構内(高津区梶ヶ谷)
- ◆工事施設 非常口(直径50m×深さ80m)
資材搬入口(直径30m×深さ75m)
- ◆工事期間 2017年2月2日～2020年7月31日
- ◆施工方式 ニューマチックケーソン工
- ◆施工業者 JV=西松建設、五洋建設、青木あすなろ建設
- ◆工事時間 月～土8:00～18:00 車両走行=同8:00～17:00 生コン車=同8:00～19:00
コンプレッサー=毎日24時間(立坑を維持するため圧縮空気を送り続ける)
- ◆発生土量 267,500 m³※(可能な限り貨物線で臨海部の三井埠頭に輸送し船で千葉県に。内陸部の埋立てに)
- ◆工事車両 最大一日700台(月間1～2回、主にコンクリートミキサー車)、これを含めダンプカー最大一日160台
- ◆走行道路 尻手黒川線(馬絹交差点から先は不明)
- ◆モニタリング 半径1km以内の井戸・地下室について(水位=工事前の一定区間と工事中は継続実施、重金属は工事前に1回、工事中は年1回、地盤沈下調査(非常口周辺)=工事前に1回、工事中は継続実施
土壌汚染調査(工事ヤード内)=発生土受入先の指定基準に沿うよう実施時期・頻度を決定
地域交通調査=車両の走行状況に合わせて周辺の走行量を調査(馬絹交差点、野川交差点)

(※連絡会が2つの立坑の容積から試算した。トンネル工事残土含めた梶ヶ谷からの建設発生土の14%に過ぎない)

vv非常口直径50mに、立穴ケーソン工事に生コン車700台投入～聞いてなかったよ

私たちの梶ヶ谷非常口予定地周辺へのポスティングとJR東海が説明会日時の各戸通知により、4日の説明会の会場となった梶ヶ谷小学校体育館はおよそ300人の住民で満員となりました。

冒頭JR東海中央新幹線建設部の担当部長が挨拶したあと、担当係長が30分あまり梶ヶ谷非常口と資材搬入口工事について上記の説明を行いました。

その後、参加住民およそ20人が説明に対する質問が出され、質問は一人3問までという規制はこれまで通りでしたが、今回は一問一答形式をJR東海も受け入れ、その結果閉会予定も20分ほどオーバーしました。しかし、住民からの質問に対するJR東海の回答がマニュアル通りで、地域の特性を十分に考慮していない対応や回答だったため、説明会の中盤から帰る住民が増え、ようやく東京・神奈川連絡会のメンバーの多くが質問できた中盤から閉会間際には3分の1程度に減ってしまいとても残念でした。

住民の質問は、工事車両の走行量や走行ルート、排ガス対策のほか、工事による騒音、振動、地盤沈下対策、残土の貨物輸送の量や運搬ダイヤ、矢上川への影響、モニタリングなど多岐にわたりましたが、JR東海は既に評価書で示された環境保全対策を述べるだけでした。大気質については国の環境基準を守る、また家屋の事前調査は法律で工事ヤードから30m以内となっているとの認識を示しました。また、ケーソン工に月1～2日700台の生コン車が走行することを初めて明らかにしました。さらに非常口の直径が50mとアセス時よりも規模が1.6倍になることも初耳です。

この日の説明会でも、JR東海は「リニア新幹線について沿線252回、神奈川だけでも60回以上開いた」と、住民に対し、いかに頻繁にそして丁寧に説明をしてきたかを強調しましたが、その内容は準備書の段階からほとんど同じで、住民の要望に応じて改善された対策は皆無に等しく、「これからも住民の皆さん、自治会や自治体と連携していきたい」という担当部長の発言が空虚なものに聞こえました。

(裏面に質疑応答の概略を記載します)

- Q「ロイヤル・ホームセンター先の道に一日生コン車700台の車両が路駐して一般車が通れなくなるのではないか」
A「700台はそんなに多くはない数だ。路駐はしない。工事ヤードの中に30台分の駐車スペースを設ける。交差点渋滞については交通量を見て行く」
- Q「矢上川に排水するのか」
A「泥水分離して水を再使用する循環型の処理をするので矢上川には流さない。最終的には下水路に流す」
- Q「井戸調査、地下室調査はどのようなことをやるのか」
A「厚生労働省に調査計画書を出して行く。ケーソン工法の立坑工事の際圧力をかけるので、井戸や地下室から空気が漏れる可能性がある」(西松建設回答)
- Q「公園の池は調べないのか。水が抜けないのか、溢れないのか」
A「池までは調べない」(同)
- Q「近くの千年川にはかじかがある。野川は自然豊かだ。そこまでモニタリングの範囲を広げるべき」
- Q「貨物線による残土運搬。いまでも地表に影響ある。工事残土の運搬で影響でないか」
A「梶ヶ谷非常口の立坑工事で出る残土は45トン、一日一便で臨海部の三井埠頭まで運ぶ。そこから船で千葉に運び内陸部の埋め立てに使う。貨物で運ぶ量はダンプカー27台分である。トンネル工事の残土は運搬や処分は未定」
- Q「千葉県の受け入れ先はどこか。契約は出来ているのか」
A「土壌汚染のないかどうか先方の基準に合わせてから受け入れ可能になれば契約する」
- Q「騒音の基準値85dBで予測値は80dB。基準値を超えたらどうするのか」
A「住民の方から苦情があればその都度個別に対応したい」
- Q「すべて55dB以下にしてください！」
- Q「地盤が弱ければ非常口工事の振動が伝わるのではないか」
A「微振動があることはわかっているので、具材の先に振動計をつけて常時様子を見る」(西松建設)
- Q「大気汚染について聞く。多摩区、麻生区では小児・成人ぜんそくが急増している。クルマの排気ガスが要因だ。工事で尻手黒川線の工事車両走行で更に増える心配がある」
A「リニア工事があっても国の環境基準0.06PPM以下に抑えられると予測している」
- Q「モニタリングは年4回やればいいのか。常時測って公開し基準を超えれば工事中止がするのか」
- Q「工事車両の安全対策について学校側と話しすべき」
A「必要あれば野川小学校の通学路に安全指導員を配置する」
- Q「家屋調査の説明がない。工事ヤードの周囲30m以内に民家が無いので梶ヶ谷ではやらないということか」
A「家屋調査の範囲は工事ヤード境界から30m以内と法律で決まっている」
- Q「井戸と地下水の調査は半径1km以内でやるという。だったら家屋調査もその範囲でやるべきだ。それが無いと、家が傾いたりしても住民がリニア工事の影響だということを証明しなくてはならない」
- Q「大深度トンネルでも家の真下にあれば地価は下落する。補償しないのか」
A「地下深く所有権はあるが大深度法の地価の公共的使用権が優先する。平素誰も使っていないところであり補償には当たらない」
- Q「工事によって不測の事態が起きたらどうするのか。山梨実験線では水涸れが起きている」
A「不測の事態は我々もあると考えているし、そうならないため状況を常に監視して行く」
- Q「リニアと県の矢上川の雨水貯留管トンネルが交差する。どの程度の距離で交差するのか」
A「県の事業計画の詳細が明らかでない。協議はしているが交差距離など詳細は現段階ではわからない」
- Q「国交大臣のリニア工事計画認可の取消を求める裁判の原告だ。工事認可取消しの判決が出たらどうするのか。掘ったトンネルを埋め戻すのか」
A「訴訟についてはコメントすることは控える。着実に実現を目指したい」

以上

(報告:リニア新幹線を考える東京・神奈川連絡会)